

Title	伊藤秀一教授逝く
Sub Title	
Author	伊東, 岱吉
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.8 (1934. 8) ,p.1269(125)- 1275(131)
JaLC DOI	10.14991/001.19340801-0125
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340801-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340801-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「デ」の時代の經濟狀態と今日の其れとは或る點に於いて類似を有するものである。然しながら、吾人は又、倫理的觀念によつて提示せらるゝ最高頂に到達するが爲めの方法學たる彼れの經濟學は、極めて多くの矛盾撞着誤謬錯覺を有するものであることを認めなければならぬ。其の論法の直截明快と其の修辭の魅力とは何人も之れを否認することを得ないであらうが、而も其の本國は固より遠く我が日本に於いてすら多大なる影響を有して居つた彼れの經濟的解決法が、完全に半世紀を経過した後に於いて、果して如何なる程度まで其の價值を復活し得るかは疑問である。彼れは主としてスミス及びリカードを第十九世紀後半に於ける英國社會主義に繋ぐ連鎖として社會思想史上に其の地位を有す可きものである。

## 伊藤秀一教授逝く

伊 東 岱 吉

昭和九年七月二十七日午前五時慶應義塾經濟學部教授伊藤秀一先生長逝せらる。

先生は本年二月初旬急性肺炎に冒され、三月二十日慶應病院に入院し、一時少康を得て五月二十日退院せられたるも、七月九日病あらたまつて再び入院せられ、約半歳にわたる病床苦闘の後、終に力盡きて永眠せらる。先生罹病の當初は輕微な風邪と思はれ、何人もその全快の速かなるを信じて疑はなかつたのであるが、流感は肺炎を併發し、肺炎は更らに執拗を極め、病勢は期待を裏切つて惡化し、終に先生を死に至らしめたのである。先生の病床に於ける半歳は洵に傷ましい限りであつた。數年來思ひを凝らされた幾多の計畫を抱き、その計畫の實現に踏み出しつゝあつた先生にとつては、徒らに病床に呻吟せられてゐることは人一倍堪へられぬところであつたらう。絶へず全快の日を胸に算へつゝ健康恢復後の計畫を楽しみにして居られた。而も容態は先生の期待を次ぎから次ぎへ無慙に破壊して行つたのである。吾々は病床に先生を訪れる毎に前日慰めた言葉が最早繰返へし得ぬことを知つて暗然とし、先生もまた泣き笑ひの表情を浮べて吾々を迎へた。病が先生に些かの余裕を與へたのは退院後の旬日に過ぎなかつた。この半年を通じて先生は爲すべき幾多の計畫を前にして焦慮し、絶へず襲ひ來る病苦と闘ひ精根盡きて

倒れたのである。成就し得ざりし生涯の事業に盡きぬ思ひを貽して逝かれた先生の心中を思ふ時何人も涙を禁じ得ないであらう。

先生は明治三十一年十一月十一日北海道歌棄郡潮路村に生れ、同村小學校を経て同四十四年函館商業學校に學び、大正五年これを卒へ、直ちに慶應義塾大學部豫科に入学し、大正十二年經濟學部を卒業して同學部助手となり、大學豫科に於て經濟原論を擔當せられた。昭和二年秋十月海外留學を命ぜられて獨逸に學び、英佛伊等を遍歴して昭和四年十一月下旬米國經由にて歸朝し、經濟學部助教を経て同學部教授となり、植民政策、經濟地理、經濟地理特殊問題及び英獨語經濟學を講ぜられて今日に及んだのである。

函館商業學校及び慶應義塾豫科時代に先生の心を捉えたものは文學であつた。石川啄木は少年時代の先生の純情を培ひ、豫科時代の先生は露西亞文學に心酔せられたと聞く。先生の社會に對する眞摯なる熱情と眞理を求めて止まぬ科學的研究心とは、やがて文學的興味を社會科學の領域に向けしめ、終に大學部助手として經濟學專攻の道を發足するに至つたのである。先生の留學直前、當時豫科學生であつた私は幸に先生の經濟原論の講義を聞くことを得たのであるが、この時初めて唯物史觀を知り、マルクス、レーニン等の名を覺えたのである。助手時代の先生はマルクシズム一般を研究され、特に露西亞革命に關心を持たれ、露西亞社會運動史に關する幾多の論文を三田學會誌上に發表された。「露西亞社會運動史」(昭和二年)の處女出版は洵にこの研究の成果である。戰後世界資本主義の一般的動搖期にあつて、日本は特にその特殊な社會經濟的條件によつてその苦惱を深めつゝあつた當時、純情眞摯な先生が新興社會科學に深い關心を持たれたことは當然の理であらう。卒直な眼を以て社會の現實を見、古き經濟學に眼前の事實の説明を見出し得ない學生が、先生を思慕せる所以もまた容易に理解しうる。慶應義塾大學社會科學

研究會、同讀書會等を中心とする研究心に燃えた學生は相次いで先生の門を叩き、先生はまた慈兄の如き態度でこれを迎へた。先生の留學は學生全般にとつて最も淋しい事柄であつたが、歸朝後の先生に對する期待は淋しさを償つて余りあつた。

先生歸朝後の講義は、帝國主義批判を基調とする植民政策と、新しい視角に立つ世界經濟論を内容とする經濟地理を以て始められた。大なる期待を以て先生の講義に集つた學生は滿堂に溢れ、坐すに席なくして後壁に並ぶものが廊下にまで續く有様であつた。時恰も世界經濟恐慌が一九二九年秋アメリカ取引所恐慌に端を發して全世界を捲席しつゝあり、今日迄足掛六年にわたる世界經濟の混亂の當初であつた。この資本主義の世界的動搖は資本主義の現段階に對する基本的考察を要求し、世界經濟に關する正しい認識を必要とした。斯かる時期に當つて先生は「資本制蓄積の理論」を發表し、帝國主義を論じ、世界經濟を分析せられた。先生の研究體系は、マルクス、ローザ・ルクセンブルグの資本制蓄積論、ホブソン、レーニン、ヒルファールディングの帝國主義論、更らにこの基礎に立つ世界經濟論、植民地論であつたものと思はれる。而して、資本制蓄積論に於てはローザの欠陥を指摘し、帝國主義論に於てはレーニンに據るところ最も大であつたやうである。この研究の序篇とも云ふべきものは「世界經濟概論」(昭和六年)であり、更らに昭和七年秋より昭和八年にかけて「世界經濟問題講座」に順次發表せられた七部の小篇である。先生の講義は目まぐるしく轉回する動搖期世界經濟の諸現象に對して拱手茫然たる學生に、考察の基礎を與へる最も意義深きものであつたと云へやう。吾々は先生の講義に接して初めて經濟社會に對する自己の分析の道が拓かれることを感じたのである。而も先生の講義は常に新しい現象の説明を以て盛られてゐた。新聞紙上に次ぎから次ぎへと報導される目まぐるしい世界經濟の動きに關する疑問は、先生の講義に於いて一つ一つ取上げられ解決せ

られた。先生が自己の講義に對して頗る真摯であり、絶えずその内容の更新に努力せられたことも察し得られるのである。斯かる點より見て、私は先生の講義は先生の著述論文より遙かに價值大なるものであり、先生の生命は寧ろ講義の中に在つたものと思ふ。

先生が講義を通じて學生に與へた教示は頗る大であつたが、これにも増して大なるものは研究會並びに日本經濟事情研究會に於けるそれであり、學生と膝を交へての熱論である。先生の性格は一面頗る神經質であつて初めは接近し難き感じを與へたのであるが、一度び接するやその強烈な氣力と純情とは人を強く動かし、その慈兄の如き優しさは人に愛慕の念を深からしめた。先生の往くところには必ず真摯な研究熱が生まれ、研究心に燃へたるものはまた先生の周圍に集つたのである。先生罹病以來薰陶を受けた學生が平癒を祈る赤誠の如何に熱烈だつたことか。

先生生前の述作は、その大なる計畫の序論に過ぎなかつた。それらは寧ろ啓蒙的役割を多分に有したものである。先生の研究はこれら諸著作に發表された基礎の上に立つて、豊富な實證的・史的材料を以て發展さるべき門口に立たれてゐたのである。先生が生前ある機會に語られた抱負の第一は、英・佛及び其他歐羅巴諸國植民地、日本の植民地、米國の對植民地政策、露亞西の植民地に對する態度等々に關する史的研究及び現状の實證的分析に基いてその理論を具體化することであつた。三田學會雜誌に屢々發表せられた植民政策及び其理論の發展に關する諸論文、滿洲及び支那を中心とする列強の帝國主義活動に關する數篇、世界經濟問題講座に發表せられた「極東經濟勢力圈」なる小篇、其他日滿ブロック經濟に關する諸論文はこの計畫の一部を物語るものである。告別式の當夜、先生歿後見出されたこの老大な抱負のプランを読み、書齋に空しく蒐集せられた滿洲、支那、臺灣、朝鮮等の經濟文獻を眺め、書齋に病臥せんことを欲した先生の心中を憶ふて獨り嗚咽を禁じ得なかつた。

先生の第二の計畫は「世界經濟概論」の増補、改訂であり、講義用に使ひ古るした同書には頁を繰る毎にその準備の書入れが見出される。更らに先生は經濟地理の領域に於てその方法の完成と、並列的な商品學に非らざる立體的な世界産業地理を纏める用意をして居られたやうである。

新築せる書齋は先生を迎へること二ヶ月に充たず、これらの抱負を空しく抱いて先生は此世を去られたのである。

(昭和九年七月三十日謹記)

## 伊藤秀一教授著作目録

### (一) 著 書

- |  |      |
|--|------|
| 露西亞社會運動史 昭和二年九月                            | 岩波書店 |
| マルサス人口論(第六版) 上巻(經濟學古典叢書) 昭和四年十一月(寺尾琢磨氏と共譯) | 岩波書店 |
| マルサス人口論(第六版) 下巻(經濟學古典叢書) 昭和五年九月(寺尾琢磨氏と共譯)  | 岩波書店 |
| 世界經濟概論(世界經濟問題叢書、第二編) 昭和六年十一月               | 同文館  |
| 帝國主義(世界經濟問題講座、第二回) 昭和七年十月                  | 春秋社  |
| 世界經濟の理論・世界經濟概論(世界經濟問題講座、第二回) 昭和七年十一月       | 春秋社  |
| 世界輕工業論(世界經濟問題講座、第三回) (小高泰雄氏と共著) 昭和七年十二月    | 春秋社  |
| 極東經濟勢力圈(世界經濟問題講座、第五回) 昭和八年二月               | 春秋社  |
| 世界重工業論(世界經濟問題講座、第六回) (伊東佑吉と共著) 昭和八年三月      | 春秋社  |
| 世界經濟の理論と概観 昭和八年六月                          | 春秋社  |

伊藤秀一教授逝く

世界農業恐慌(世界經濟問題講座、第九回) 昭和八年八月  
植民政策・植民地問題(世界經濟問題講座、第十回) 昭和八年十月

春秋社

(1) 論文

共產主義の經濟的基礎に就て(上)(三田學會雜誌、十八卷五號、大正十三年五月)  
共產主義の經濟的基礎に就て(下)(三田學會雜誌、十八卷六號、大正十三年六月)  
農奴解放後の露西亞社會運動(一)(三田學會雜誌、十八卷七號、大正十三年七月)  
農奴解放後の露西亞社會運動(二)(三田學會雜誌、十八卷八號、大正十三年八月)  
農奴解放後の露西亞社會運動(三)(三田學會雜誌、十八卷九號、大正十三年九月)  
社會と自然との平衡關係と生産力(三田學會雜誌、十八卷十一號、大正十三年十一月)  
七十年代の露西亞社會思想概念(三田學會雜誌、十九卷二號、大正十四年二月)  
勞農露西亞に於ける農民問題(三田學會雜誌、十九卷四號、大正十四年四月)  
自然的地理的環境の經濟學的考察(三田學會雜誌、十九卷七號、大正十四年七月)  
「ツ・ナロッド」と其後の革命的社會運動(三田學會雜誌、十九卷十號、大正十四年十月)  
經濟地理學研究に關するシュミッドの見解(三田學會雜誌、二十卷三號、大正十五年三月)  
海洋の發展に關する經濟地理學的一觀察(三田學會雜誌、二十一卷二號、昭和二年二月)  
失業對策と植民地(三田評論、三九三號、昭和五年五月)  
近世植民制度の發端とマイカンチリズム(三田評論、三九五號、昭和五年七月)  
近世初期の對植民地政策に就て(三田評論、三百九十八號、昭和五年十二月)  
資本制蓄積の理論(三田學會雜誌、二十四卷十二號、昭和五年十二月)  
植民政策と自由主義—英國植民政策史上に於ける自由主義の時代に就て—(三田學會雜誌、二十五卷八號、昭和六年八月)  
ソヴェート對外貿易政策と世界經濟(産業研究、第六輯、昭和六年十二月)

帝國主義の概念に就て(三田學會雜誌、二十六卷二號、昭和七年二月)  
植民政策と帝國主義—植民政策研究序説—(三田學會雜誌、二十六卷十號、昭和七年十月)  
世界經濟に關する文獻(世界經濟問題講座、第一回附錄、昭和七年十月)  
スターリン(世界經濟を動かす人々其二)(世界經濟問題講座、第二回附錄、昭和七年十二月)  
支那に於ける重工業原料の生産に就て(産業研究、第七輯、昭和七年十二月)  
帝國主義と資本輸出(經濟研究、創刊號、昭和八年一月)  
世界帝國主義の動向(經濟往來、八卷一號、昭和八年一月)  
ジョン・ヘイの「門戸開放」宣言—支那に於けるアメリカ帝國主義の一齣—(三田學會雜誌、二十七卷二號、昭和八年二月)  
支那問題に關する文獻(一)(世界經濟問題講座、第七回附錄、昭和八年五月)  
日滿經濟ブロック論批判(經濟研究、一卷五號、昭和八年五月)  
蔣介石(世界經濟を動かす人々其八)(世界經濟問題講座、第八回附錄、昭和八年六月)  
滿洲に於ける「非外交」の發端(三田學會雜誌、二十七卷七號、昭和八年七月)  
支那問題に關する文獻(其二)(世界經濟問題講座、第九回附錄、昭和八年九月)  
世界市場と經濟ブロック(中央公論、四九年一號、昭和九年一月)  
「國際借款團」と米國(三田學會雜誌、二十八卷一號、昭和九年一月)  
ウィットフォード「支那の經濟と社會」(三田學會雜誌、二八卷二號、昭和九年二月)  
世界市場の梗概と今後の我貿易(エコノミスト、十二年四號、昭和九年二月十五日)  
滿洲産業統制概観(慶應義塾産業研究會編、「世界經濟戰と我國産業の動向」、昭和九年二月)